

題目：脳機能イメージングを用いた認知機能研究とその批判

氏名：井上 研

所属：名古屋大学 情報科学研究科

「1993年、機能的磁気共鳴画像法(fMRI)に言及している公刊論文の数は20に満たなかった。2003年、その数は1800近くになった」(Berman, Jonides and Nee 2006)と述べられているように、脳機能イメージングは重要な測定装置としてヒトの認知機能を解明しようとする実験に取り入れられるようになってきている。そしてその研究対象は知覚、記憶から、ステレオタイプ、態度と態度変容、対人知覚、自己知といった社会的認知の領域にまで広がってきている(Ochsner and Lieberman 2001。また、『神経心理学』第23巻第4号(2007)では「社会的認知と神経心理学」という特集が組まれている)。

本発表では、

- ・脳機能イメージング(特にfMRI)の生み出すデータとはどのようなものなのか？
 - ・研究者たちは心と脳のプロセスを研究するために、実験においてその技術をどのように用いているのか？(例えばBerman, Jonides and Nee (2006)は、fMRIのデータの用いられ方に応じて、実験を五つのタイプに分類する)を概観した上で、
 - ・脳機能イメージングを用いた認知機能研究に対する批判
- を見ることにする。

参考文献

- ・Berman, Jonides and Nee, (2006), "Studying mind and brain with fMRI", *Social Cognitive and Affective Neuroscience*, vol. 1, no.2, pp. 158-161.
- ・Ochsner and Lieberman, (2001), "The Emergence of Social Cognitive Neuroscience", *American Psychologist*, vol. 56, no. 9, pp. 717-734.